公民館まつり

料理グループ
日頃の腕の見せ所

コーラス（ふる里を歌う会）

2月17日　ゆめあるて

第 697 号
発行人●豊丘村公民館
館長　原　国人
編集人●長野県下伊那郡
豊丘村公民館報
編集委員会
0265－35－9066
印刷所●龍共印刷株式会社

私たちの村
(3月1日現在 ※外国人を含む)

男	3，345人
女	3，381人
総人口	6，726人
世帯数	2，152戸

公民館学習会和やかに閉講式

～関心・感動・感謝～

3月5日

昨年五月にスタートした今年度の公民館学習会は、この日第十回目の講演と閉講式が行われました。登録会員数百五十五名、平均出席者数八十九名、十一名の方が皆勤されました。

公民館では、新年度の会員募集をしています。多くの皆様是非公民館学習会へお出かけください。

《申込み期限》
四月十二日（金）
公民館　☎三五－九〇六六

2019年度公民館学習会　年間計画

回	月日	内容	講師
1	5月16日（木）	開講式 「手話ダンスの世界」	手話ダンスアーティスト MIWA（深澤美和さん）
2	6月11日（火）	バスハイク （安曇野美術館めぐり）	
3	7月18日（木）	「語り継ぐ満蒙開拓」	三沢亜紀事務局長 久保田諫さん
4	8月20日（火）	「高齢者の防災 ～雨・地震から身を守る」	飯田市危機管理室 係長 後藤武志氏
5	9月20日（金）	「童謡唱歌を歌いましょう～秋」	長野県童謡唱歌を歌う会 会長 清水正則先生
6	10月24日（木）	「認知症の方との接し方」	はやしの杜 服部美秀先生
7	11月27日（水）	「楽しく学ぼう人権基礎講座」	南信教育事務所飯田事務所 主任指導主事
8	1月9日（木）	「軽スポーツで脳の活性化」	南信教育事務所飯田事務所 指導主事
9	2月6日（木）	「仏の知恵を暮らしに生かす part3」 ～終活に向けて～	天台宗瑠璃寺住職 瀧本慈宗氏
10	3月3日（火）	「身体のお手入れ」 「お楽しみ～茶話会」 閉講式	健康運動指導士 牧内隆雄先生 劇団ふたりずら

◆場　所　豊丘村交流学習センターゆめあるて
◆学習時間　午後１時20分から３時まで

お問い合せ：公民館 35－9066　担当 原

公民館学習会に参加して

山田　田戸ヒデ子

ようやく孫達から手が離れ、二年前から学習会に参加させていただいております。ゆめあるていっぱいの会員の皆様にお会いでき、本当にうれしく思いました。

心配した難しい勉強会とは異なり、目で見て心に感じ、体と脳を使って健康を学ぶ。興味深い身近な歴史、悲しい戦争の歴史、何より楽しいバスハイクでの学習。おやつまで用意していただき感謝！感謝の学習会です。また、自分自身の歩みを見つめ、人様の幸せにどう関わって行けるのか等、わかりやすく教えていただき「あっ」という間でした。

この学習会の成果として、私は私なりに自分の心の中に『天国』を作り、幸せと感謝の心で皆様と楽しく生きて行きたいな！と思える自分を感じております。

関係の皆々様のお骨折りに心から感謝申し上げ、今後もご指導よろしくお願い申し上げます。

励まし、励まされ…

公民館まつり

平成三〇年度の公民館まつりが、二月十七日に開催されました。公民館功労者表彰、教育委員会文化スポーツ表彰に続き、特別企画のピアノお披露目ミニコンサート、アレンジフラワー！料理教室・ステージ発表等、豊丘の文化活動満載の充実した一日を過ごしました。

初舞台

柿外土　矢島千勢子

個人的な事になってしまいますが私が大正琴を弾いてみたいと思ったのは四十代半ば頃でした。テレビで宣伝する通信販売を観て『テキストに沿って練習すれば簡単に弾けますよ』の謳い文句に踊らされ嬉しくなり購入しました。いざ家に届き、弾いても簡単に一人では出来る物ではありませんでした。習い事で外に出る余裕の無い時でしたので、諦めていつかは絶対弾いてみたいという気持を胸に納め琴を押入の隅にしまいました。この歳にして先生に付いて習い弾いてみたい気持が湧き上がって来ました。友達に声掛けすると数人が集まって下さり皆で「弾いてみたいね、習ってみたいね」と興味を持ってくれましたので早速公民館にお願いして村内の鹿角幸子先生を紹介して頂きました。先生は琴を用意して下さり全ての事を御世話して下さいました。大正琴を見る事、触れる事何もかも初めての私達でしたが先生は優しく時には厳しく愛情を持って御指導下さいました。聞くと弾くとは大違い、指使いピックの持ち方等初心者の私達には大変難しく心が折れそうになる時もありました。一生懸命練習を重ねて何となくスムーズに音も揃い曲らしくなった時の嬉しさは格別なものでした。先生から練習有るのみと常に励まされ練習に練習を重ねて来ました。二月に公民館祭りがある事を知り、皆思いきって参加してみたい気持になり、目の前の目標に向け心をひとつにして先生の御指導を基に練習して来ました。当日は五人の音も揃い三曲無事弾き終える事が出来、先生からもお誉めの言葉を頂き皆達成感と安堵の気持で一杯でした。この様な機会を与えて頂き初舞台を踏めた事は協力して下さった公民館の皆様、熱心に御指導下さった鹿角先生、多くの皆様方に今は感謝の気持で一杯です。本当にありがとうございました。

大正琴の会

段丘

今月号の本紙3面「とよおか一〇〇年前」では方言が豊かに用いられている。この文中に出て来る「おつかいでございます」という方言は夜間、よその家に訪問した時の挨拶である。「お疲れさま」が語源らしい。標準語なら「こんばんは」に当たる▼なぜこんなことを書くかというと、若い世代に通じないのでは、と思うからだ。有線テレビ12チャンネルで見る村の子供の言葉に、方言が少なくなっていることに気づく人はわたしだけではないだろう▼昭和53年に地元の人が書いた随筆の一部分を紹介する。弟が戦後3年間のシベリア抑留を経て帰宅した時の様子である。『「行ってきました」と静かな声が聞こえてきた。まぎれもなく、それは弟の声であった。弟は、細長い庭の土間を歩いてきて、台所のところへひょっこり顔を出した。『行ってきました』」（藤本信一「弟」、飯伊民主文学同盟発行『花崗岩』より）。「行ってきました」を「ただいま」と言い換えては、再会の喜びは伝わらない。だが、この挨拶もやがては使われなくなるかもしれない▼方言を使わなくなる大きな理由は、都市の文化に染まることが進歩だという、根拠のない思い込みである。言葉は使わなければ消える。方言が都市への劣等感で滅びることを自覚し、せめて郷愁くらいは感じたい。

（王生雅穂）

蛇川下流域三六災害体験談(1)

堤防すれすれまで水が流れ、大きな石が浮いていった

聞き手　原　章（古畑）

あの三六災から五十八年目を迎えます。当時のことを詳しく知る人もだんだん少なくなって来ています。大きな災害で大変な思いをしても、時間が経つと人は忘れるものです。私たちは、忘れないための工夫をしなければいけないと思います。

三六災の時の蛇川下流地域、上村（かんむら）などの状況を詳しく記憶されている、お二人の方に別々にお話を聞き、それをインタビュー形式でまとめてみました。何回かに分けてお伝えします。

☆三六災以前の蛇川や堤防は、今と比べてどのようでしたか？☆

「三六災の前の蛇川はもっと狭くて災害の後に広くした。以前の堤防は、土手のようで狭くてリヤカーがやっと通るくらいの広さしかなかった。災害後に建設省が堤防を大きくし、川も広めた。」

☆三六災の時に蛇川の水がどのぐらいまで増えましたか？どんな流れ方でしたか？☆

「堤防の高さとすれすれくらいに水が流れた。堤防が切れて氾濫したということはなかったと思うが、蛇川の水がどこかであふれるようなことはあったと思う。今、新蛇川橋の少し上の川の中にあるような大きな石が浮いて行くのを見た。大きな石だが、流れて行くっていう感じじゃなくて浮いていったという感じだった。石も流れたけれど、砂もたくさん流れてきた。」（続く）

新蛇川橋から見た大きな石（上方に見えるのが蛇川橋）

史学会総会

「阿島知久家と豊丘村」を聞いて

林里一　横前　達

二月二十四日の豊丘史学会総会で、飯田美術博物館客員研究員・鈴川博先生の「阿島知久家と豊丘村」と題する講演をお聞きした。

最初に先生は「様々な角度から歴史にアプローチする」、「文献史学とは少々異なり、古文書史料のみを信用しないで、当時の文献を分析する」と、自身の研究方法を説明された。

知久氏のことについては江戸時代に田村村・河野村の領主であったので、私もある程度の知識があったが今回のお話では、これまで通説となっている事柄に対して、独自の研究に基づく新しい説を述べられた。

そのいくつかを挙げると戦国時代の知久氏の歴代の人々の名前には、同名の者がいるという点である。

たとえば、武田軍と戦って伴野の南堂で討死した知久頼康の墓は、南堂にあったが、東岸寺にも知久頼康の墓があり、これは同名異人の墓であるとのことである。他にも同名異人があり知久氏の歴史を理解し難くしているとのことである。

また、阿島知久家初代の則直が、徳川家康から三千石を与えられて、祖先の地に戻ってきたとき、最初に居住したのは、田村村の池田丹後の屋敷であったが、何故この家へ居住したのかという理由として、通説では田村村を祖先が支配した土地に含まれていたからだとされる。しかし、これは阿島知久家の祖先が、戦国時代に田村村に城主として居住していた縁によるものだとのことである。

配布された資料は人名が多く、複雑で理解が難しかったが、知久氏と豊丘村とは、戦国時代から知久氏の一族が田村村に居住しており、江戸時代には阿島知久氏領としての田村村・河野村があり、古くから長い時代にわたって、深い関係があったということを理解でき、よいお話を伺うことができて幸いであった。

シリーズ「元気な高齢者」54

幸せ支える丈夫な体と周りの人の協力に感謝

春日　敏（さとし）さん　八十八歳

中芝在住

昭和五年に、現在地で七人きょうだい（男四・女三）の総領として生まれた。両親は養蚕、米作、果樹を主とする農家であった。長男ゆえに必然的に幼少の頃から家の手伝い及び弟達・妹達の世話をしていた。学校までの一kmほどの距離を、近くの同級生と連れだって登校していた。体質的にしもやけになり易く、小学校当時は皆が外で遊んでいるのに、一人教室でストーブの番をすることが多く、残念な思いが今でもある。しもやけはその後二十歳頃まで悩まされた。小学校を卒業、高等科一年を経て喬木の農蚕学校へ進み四年間学んだ後、家で農業に従事した。

親から聞かされ、今でも強く思い起こす事がある。父親の弟が東京の物理学校を卒業し、呉の海軍工廠魚雷実験所で執務中に肺炎が原因で昭和六年に二十二歳の若さで亡くなってしまったことである。現在の医療技術であれば問題なく治癒したであろう症状と思われる。敏さんが幼少の頃、良く遊び可愛がってくれた叔父なので非常に悲しい思い出だ。

三十五年に親戚の叔父の世話により、飯田市生まれで七歳下の延子さんと結婚した。延子さんは敏さんの手伝いをしながら外へ働きに出ていた。広大な農地を多忙時には近所の人の応援を頼むことはあったが、大概は家族だけで懸命に耕作した。農地解放により多くを供出したことは、時代の流れとは言え一抹の虚しさがあった。現在は桃及び柿を主力とし、他にブルーベリーを若干作付けしている。

公務では区会議員を十年間勤めたが、丁度パソコンが流行り始めた頃で、会議の資料作りに苦労した思い出がある。他に消防を約五年間、青年団を三年間、それぞれ主力メンバーとして勤め地域の発展に寄与した。区会議員の同期の人達を主体に、毎年全国各地へ初詣に行っており、大きな楽しみになっている。

現在でもメガネ無しで新聞を読めるし、脚力、聴力ともほとんど問題ない。食事は何でも美味しく頂け、今までに入院の経験が無く、血圧が若干高い程度という健康体である。また日常的に軽トラを運転しているが、家族からは最近の世間の事故等強く言われているので十二分に意識し注意している。テレビは相撲を偶に見る程度で、ラジオを好んで聞く方だ。趣味は、カラオケで大きな声で歌うのが好きだ。以前は反体制的な内容が多かったが、現在は専ら演歌主体である。酒類は体質的に弱く若い頃から苦い経験の方が強い。長男一家との五人家族であるが、各々が勤めているため一緒に食事することはほとんどなく寂しい思いがある。

きょうだいは生後間もなく亡くなった一人を除いて今も皆元気であるが、弟は二人共遠方に住んでおりまれにしか会えない。妹は飯田市近傍におり度々会い互いの近況を確かめ合っている。これまで農業一筋の人生であったが、その折々を夢中で生きてきた。それも家族を始め近所の人達の協力があってのことと、深く感謝しながら幸せを噛みしめている。

文責　桐崎　長一

公民館登録グループ活動紹介　第17回

ひばりの会

柿外土　北原　淑

私達ひばりの会は、六年前より始めたパッチワークの会です。ゆめあるてにて、毎月第二第四金曜日に飯田市伊賀良より佐々木正子先生に御指導いただき活動しています。

パッチワークの基礎用語も理解出来ずに三角形や四角形の型紙で布を裁断し、また端ぎれ等を利用し縫い合せて行き今迄にクッションカバー、カジュアルバッグ、ストリングバッグ等々制作致しました。またカード入れ、ポーチ等々小物類も制作しております。同じ作品も一人一人の感性豊かな出来映えに感心すること頻（しき）りです。

先生の助言をいただきながらも自分達で布を選び配色を考え頑張った作品ですので完成の喜びと達成感はとても大きいものです。

一針一針に集中しながらも常に皆さんと和気藹々とほうふな話題と笑声でいっぱいな会員六名の楽しい会です。今は新しい作風に挑戦中で頑張っております。

なお喬木村や高森町、駒ヶ根市等に個展やグループ展があれば見学に出掛け勉強会と親睦を深めております。

第6分館 冬季レクリエーション

歓声と笑顔に包まれた囲碁ボール大会

第六分館長　小池光好

二月十七日（日）に佐原地区冬季レクリエーション（囲碁ボール大会）が佐原区民会館で行われ、保育園児から年配の方まで幅広い世代の人達が参加されました。

囲碁ボールとは、スティックでボールを打ち、碁盤になった人工芝マットにボールを並べて得点を競うもので、自動車一台分の平面があればどこでも楽しむことができるニュースポーツです。地区外に出掛けなくても地区の施設内でできること、小さな子どもから高齢の方まで、老若男女年代を超えて一緒に楽しめること、経験の有無や運動神経の良し悪しにあまり左右されないことなど、従前のボーリング大会に比べ、地区のコミュニティ醸成に寄与しているのではないかと考えています。

当日は、午前中に分館役員が三セットを会場に設置し、午後一時に開会。模擬を混ぜながらのルールの説明後、グループ分けに入りました。昨年は生年月日順に組み分けしたので、今年は名前のあいうえお順で分け、ゲームを開始、二時五十分まで三試合行いました。新しいゲームへの取組みということも考慮し、一応局毎に得点は付けましたが、特に勝敗にはこだわらず、ゲームそのものに興じました。相手の「目（もく）」を崩すナイスショットがあったかと思えば、自分のチームの「目（もく）」を崩すショットもあり、また、弱かったり、逆に強過ぎたり、はたまた、方向違いだったりして、碁盤の枠を外すショットも多々あり、その都度大きな歓声があがるとともに満面の笑みが弾け、皆童心に帰ったようにゲームに熱中されていました。

三時から分館学習会を開催。佐原地区・北澤委員長より、佐原地区が抱える課題を踏まえた現在と今後について講話をいただきました。情報の共有がなされ、住民が一体となり、協力して取組みを推進していくための一助になったと思います。

三時四十分から交流会に移り、慰労と親睦を図りました。地域の絆と一体感を実感した一日になったのではないかと思います。

第7分館 料理教室

そば打ち体験をしました

第七分館長　宮下弘幸

二月三日、豊丘村交流センターだいちで、十五名が参加して料理教室を行いました。内容は手打ちそば作りで、講師には林里の森田昇さんをお願いしました。

作ったのはそば粉四百グラムにつなぎの強力粉百グラムを加えた「二八そば」。そば粉は下伊那産の「信濃一号」という品種を使いました。

二百五十ccの水を少しずつ加えながら次第に大きなかたまりにして練り、のし棒で薄く広げていきます。水加減によって仕上がりが変わり、包丁で麺にする頃には参加者のそばにも個性が出てきました。

たっぷりの湯に入れ、沸騰して一分後に水にさらしてざるに盛り付け。煮干しのだしで作ったつゆと、親田辛味大根の薬味でいただき、参加者は手作りのそばに舌鼓を打ちました。

講師の森田さんからは「手打ちそばにはいろいろな方法があるので、それぞれで研究するように」とのアドバイスがありました。

とよおか100年前 ㊲

『豊丘村民話集』より

人魂物語

松村鶴見

兄貴が「鶴やー、ほい、おつけいに行ってくれねいか、おれ今夜、用事があるんだ」

「はあ、どこへ」

「屋敷の今朝一さんのところへ軍人会の通知だ」

「はあ、いってくるよ」

「今夜、暗いぞよ」

「はあ」

おばあまが「提灯つけていけよー」

「なーに、いってくるよ」

暗い夜道を二丁、有名な大竹藪の中を通り抜けて間沢川の橋を越すと生田分倉平大井の井道をふんばずさねえように急ぎだ。大畑の下のところは右崖下間沢川、左は井水の細道を辿り屋敷まで。

「ごめんなんしょ、おつかいでございます。軍人会の通知を持ってきたに」

今朝一さんが「ありがとうございました。よってっておくんなんしょ」

「夜だかなむ。おやすみなんしょ」

「ありがとうございました」

帰りの方がいくらか道が見える。井道をきて橋場、間沢川橋までくると、観音堂の前、松上の方から灯りがくるので、やれやれと思い橋をとんで渡り、大竹藪の真ん中の三叉路までくると前の車屋井水の上を灯りがすーっと通りぬけた。あまり早くもないが、浮いたように、すーっと栃ヶ洞から切通しの方へ上り、すーっと消えた。

はてな、今の灯りはなんの灯りかな。真っ暗な竹藪の中の三叉路にたちすくみ、ぼんのくぼから背すじが、ぞくっと寒くなった。そう、今の灯りは光がなくて青みがあった、真っ暗い竹藪の中、道を少し左へ歩くと車屋井の土橋を渡り、栃ヶ洞の方へ少し上がり、東のお墓のところから細道をわが家へ。

「いってきたよ」

おばあまが「暗かったろう」

「ああ、暗かった」

「それで提灯つけていけったんだ」

「いま、光り物が通ったぜ」

「どこを」

「お観音堂の方から竹藪の中を通り抜けて栃ヶ洞の方へ、青いような光り物がすーっといったぜ」

おばあまが「そりゃだれかのぬけ魂じゃねえか。だれか死なにゃいいがなあ」

ああ、どうも寒気がとれない。いそいで寝床に入ったが、寝付かれない。今夜の光り物は何かなあ。人魂ってもんかなあ。その間に眠りこんだ。

もう朝になった。

「おはようございます」。戸間口のところでまた「おはようございます」。お隣、西のおばさんだ。

「ゆいつぎをお願えいたします。松葉屋のきしさんがなくなったで、朝飯たべたらあつまってもれいていってお願えいたします」

はあ、ゆうべの光り物は松葉屋のおじいさんの魂が本家へ寄って寺の方へ行ったのかなあと思いました。

（豊丘村民話集・第壱輯〈昭和五十二年〉より）

文責　壬生雅穂

こちら資料館 ㉓㉓

義勇軍生存者の随筆

昨年の五月ころ『捨てられた民』『鎮魂・孤愁』と題した小冊子二冊（写真）の寄贈を受けました。

著者は、北海道帯広市在住の久保田二三夫（俳号 信鈴）さん、寄贈者は鹿児島市の西牟田義則さんです。

西牟田さんの手紙には「俳句仲間の久保田さんは旧河野村の出身です。これは氏が自分の戦争体験を綴った随筆です。当時の村の様子が赤裸々に語られています。豊丘村の方々に是非読んでもらいたいと思い寄贈します。」と書かれていました。

早速読んでみますと、久保田さんは堀越に生まれ、小学校高等科卒業と同時に義勇軍に志願して満州に渡った方でした。満州の訓練所・開拓団での生活、終戦時の逃避行、捕虜、引き上げ、帰郷、北海道への移住、……、今日までの九〇年余、国策に翻弄された久保田さんの人生が俳句を交えながら事細かに語られています。

「これはっ」と思った私はすぐ満蒙専門家の筒井芳夫さんに見ていただきました。そして、筒井さんのご尽力により、当時の義勇軍名簿で久保田さんを確認するとともに、帯広の久保田さん本人とも連絡を取ることができました。満蒙の貴重な生き証人の発見です。

二つの冊子は村の図書館にあります。ご一読下さい。

二月二十五日(月)アカシアマレットゴルフ場において三十七名(男二十一名・女十六名)の参加をいただき、豊丘村社協主催マレットゴルフ大会を開催しました。

この大会は、社協を身近に感じていただくための催しで、昨年まではゲートボール大会として行ってきましたが、新しい試みとしてできるだけ大勢の方の参加を期待して、マレットゴルフの大会として企画しました。

開会式では、主催者の挨拶に続き、来賓の菅沼副村長の祝辞を頂きました。

天候が心配されましたが当日は晴天に恵まれ、春を思わせる日差しの中、参加者の皆さんは和気あいあいとした中にも、真剣にプレーをされていました。

競技は十八ホールストロークプレー(パー七十二)の個人戦で、男性の部で中平の松下好男様、女性の部で下市場の阿部治子様が優勝されました。

初めての企画でPR不足や、他の行事もあって参加者数が心配されましたが、多くの皆様のご支援・ご協力を頂き盛大に開催できました。ありがとうございました。

来年度につきましてもご意見等をお聞きする中で、大勢の皆様が気軽に参加でき、楽しんでいただける企画を考えていきたいと思います。

社会福祉協議会では、今後も一層の地域福祉の充実に取り組んでまいります。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

入賞者（敬称略）

女性の部
優勝　阿部　治子
準優勝　片桐　京子
第三位　中塚　勝子

男性の部
優勝　松下　好男
準優勝　林　皎
第三位　小池　富雄

総合
第四位　菅沼　厚子
第五位　宇佐美トクエ
第六位　中村　ヌイ
第七位　井原　康明
第八位　小澤　保澄
第九位　壬生　守
第十位　河瀬　孝信

ホールインワン賞
河瀬　孝信
筒井　芳夫
片桐　茂房

（社協　地域福祉課）

豊丘村図書館・資料館からのお願い

豊丘村、神稲村、河野村について書かれた（記録された）古い資料を寄贈してくださる方を探しています。

（例）公民館報
縮刷版第一集
神稲人物誌
河野村誌略、など

お心当たりのある方は、豊丘村図書館・資料館までご一報ください。

電話
図書館　☎三五―二二八六
資料館　☎三五―九〇六六

～シリーズ～ No.182 豊丘の自然

ガビチョウ
（スズメ目チメドリ科）

確定申告で役場へ。源泉徴収票を見ながらコンピューターを操作していた係の方が、最後に、「マイナンバーカードをお持ちですか」と。「まだ、作っていません」それ以上の要求はなかった。後で分かったことだが、渡されたコピーには、「個人番号は複写されません」とある。個人番号は、すでに登録されているのだ。それにしても、私本人とマイナンバーを、どう一致させたのだろうか。係の方は。

今月の主役は、ガビチョウ。古くは江戸時代から愛玩・観賞用として輸入されていたようだが、一九八〇年代には人気がなくなり、ペットショップの店頭から姿を消した。以前に紹介したソウシチョウ同様、かご脱けで野外へ。**（山田　拓）**

写真提供、石毛京子氏

むらある記 第23記

カメラ片手に村内ブラブラ。消え行く姿を残す

新春より真っ先に丘を染める白い花

福島地籍よりアルプスを望む

冬から春へ、寒さはいくぶん和らいだもののまだ肌寒さが残る三月。色味の少ない味気ない野山に、早くて一月下旬辺りから真っ白な花を開かせてくる小さな蕾がある。待ち望んだ最初の春の花『小梅』が辺り一面に咲き始めるのだ。

日本画でも好んで題材になっている梅だが、春先には黄色が多いことで白もこの季節の色として人気がある。伊那谷に於いて小梅の栽培は、手間もさほどかからないと言うことから先を争い盛んに栽培されてきた時期があった。しかし需要が少なくなると、せっかくの実がなっても収穫されないままになっていることが多い。果実は青いルビーの別名を持つ綺麗な色で、葉と同色で見分けがつかないが、カリッと漬かった梅干しは、おにぎりなどには欠かせない日本独自の食品となっている。

観賞用の紅梅と小梅の白とは縁起ものによく用いられ、同じ花でも紅白揃ったものはさほど多くはないため、貴重といえるだろう。続いて桜が咲き花の季節を迎えるのだ。

写真／文　宮下正弘

俳句短歌

寒椿紅一点の息遣い　磯部セツ子
一人居のなごみごころの初音かな　田中　静
針箱の出番少なし針供養　片桐　洋子
冬入日カーブミラーの中にあり　森田　恵子
節分の豆蒔きに見る今昔　三島　保子
おだやかな夜明けつれくる春の霤　三島　里子
霜わらび荒野にひそと色深む　木下　眞水
稲荷堂参りし足で梅探る　松岡　照子
父の背に泣きゐし頃のどんどかな　宮下　公
伊那峡（はざま）天地かわきて枇杷の咲く　宮下　純子
初孫や大寒の湯気香ぐはしく　林　恵美子
天竜川の闇ひびきて鬼をやらひけり　丸山　時子
寒卵いのちのままを胃に落す　北原　昭子

〈とよおか短歌会〉

寒すずめ風花きらめく裸木（はだかぎ）に何啄むや陽にきらめける中　毛涯百合子
凍てつく夜雲間に現るスーパームーン次期は無理かとまぶたに止（とど）む　福澤貴美恵
日記にはレタスの種を蒔くとあり昨年（こぞ）に習いてポットの準備　筒井　恵子
あざやかな五島つばきに迎えられ隠れキリシタンの福江島巡る　松下　泰見
野良仕事終えて夜には指折りて短歌（うた）詠みていし亡母（はは）目に浮かぶ　大原眞由美
アイボ犬足踏みしたりうた唱う人工知能はどこまですすむ　松尾ヒサコ
「はつらつ」の正月あそびは若返るトランプ、花札、坊主めくりで　壬生　千春
昼間っからビールを呑んで寝ちゃいたい干し柿出荷やっと終わる日　北澤　秀子
激動の戦前戦後を長らえて新元号は目前となる　大倉　知江
待ち針の刺さりしままの針坊主土蔵（くら）より出づる眼うらの母　福澤　亀人

川柳

〈豊丘村川柳クラブ豊柳会〉

▼課題「場」　福沢勝美　選
春場所へ期待を寄せる御嶽海　安田　喜子
地場の柿大賞支えた高齢者　市沢　照子
場当たりでしのぐ政府の強引さ　山本　義彦
軸吟…道の駅地場産野菜顔揃え

▼課題「脱」　互　選
脱原発被災地の声届かない　桃沢　健介
春一番一枚脱いで畑仕事　林　もも子
脱けて来た昭和平成我が旅路　久保ひろし

▼自由吟　久保ひろし　選
雪わずか豊作懸念老いの感　福沢　勝美
守るはず親も兄相も腹立たし　原　美風
当り前のことが美談となる世相　西元　峯子
軸吟…再会の席へ調髪背を伸ばし